西園雅集図をめぐって（下）

福本雅一

六

前回は最後に、『歴代題画詩類』に見える元人の三詩を紹介したが、引続き元末明初の私家集を探索し、「西園雅集図」を歌う次の二詩を得た。生卒は共に明らかではないが、胡助は元末の人、王恭は年六十余で、『永楽大典』の編纂に加わったという。

題王晋卿西園雅集図　　元胡助[19]

汴京文物盛　汴京　文物盛んなり
想見元祐時　想見す　元祐の時
迅掃開西園　迅く掃いて　西園を開き
勝事春遲遲　勝事　春は遲々たり
如何貴公子　如何ぞ　貴公子の
雅有書畫癡　雅に書画の癡有るは
休暇足蕭散　休暇　蕭散足り
群賢會於斯　群賢　斯に会す
曲徑穿深竹　曲径　深竹を穿ち
幽花俯清池　幽花　清池に俯す
澹若忘世念　澹として世念を忘るが若く
稍覺山林姿　稍く覚ゆ　山林の姿
堂堂眉山公　堂々たり　眉山公
翰墨何淋漓　翰墨　何ぞ淋漓たる
詞源倒三峽　詞源　三峡を倒にし
旁觀但嗟咨　旁観　但だ嗟咨す
從容潁濱老　從容たり　潁浜の老
緩帶相追隨　緩帯　相い追随す
或據案凝望　或いは案に拠りて凝望し
或曳杖委蛇　或いは杖を曳きて委蛇す
松陰羅古器　松陰　古器を羅ね
時復斟酌之　時に復た之を斟酌す
漱井坐晚涼　井に漱ぎて　晚涼に坐し
得句秀且奇　句を得れば　秀且つ奇
道人方摘阮　道人　方に阮を摘み
淮海音獨知　淮海　音は独り知る

石屏峭崖立　石屏　峭崖立ち
揮毫者爲誰　揮毫する者は　誰と為す
豫章學空寂　予章　空寂を学び
危參方外師　危して参ず　方外の師
茶烟落花畔　茶烟　落花の畔
禪榻鬢成絲　禅榻　鬢は糸と成る
徜徉各有適　徜徉すれば　各おの適する有り
造物非吾私　造物　吾私するに非ず
諒能燭茲理　諒に能く茲の理に燭さば
浩然無所疑　浩然　疑う所無し
龍眠精繪事　龍眠　絵事に精く
展卷有餘思　卷を展ずれば　余思有り
我已後諸公　我れ已に諸公に後れ
三歎題此詩　三歎して　此の詩を題す

題宋王駙馬西園雅集卷　明王恭[20]

西園簪珮日聯翩　西園　簪珮　日に聯翩
共愛風流戚畹賢　共に愛す　風流戚畹の賢
金將池臺連帝里　金将池台　帝里に連り
玉堂詞翰藹賓筵　玉堂の詞翰　賓筵に藹たり
機閒羽士絃中意　機は間なり　羽士絃中の意
心靜林僧竹下禪　心は静なり　林僧竹下の禅
莫向繁華驚物換　繁華に向いて物の換るに驚く莫かれ
大梁宮樹也蕭然　大梁の宮樹　也た蕭然

前章の于立・姚文煥・張天英の三詩は、いずれも「西園雅集図」と題してはいるが、作者を記していない。しかしここに挙げた胡助に至って、「龍眠精絵事、展卷有余思」と、初めてそれが李公麟であると明言している。また胡助と王恭の二詩に、王晋卿や王駙馬の名を冠しているが、これは彼が「西園雅集図」の作者ということではなく、雅集の主催者を意味しているのは、詩の内容によって明らかである。

詩ではないが、陳基の「跋西園雅集図[21]」を、元人の証言として更に加えておこう。

故宋の駙馬都尉王公晉卿が西園の集は、亦た盛んなり矣、蓋し駙馬の賢に非ざれば、以って諸老を致すに足らず、諸老に非ざれば、以って西園の勝を顕すに足らず、然らば則ち戚畹の貴も、駙馬の栄と為すに足らず、而して其の名の不朽に垂る者は、政に其の能文好士を以って耳、吁、昔自り王公大臣、孰か園池水竹の楽み無からん、百世の下、能く人をして文に臨みて慨を興さ使め、甚だ謂えらく、世道の盛衰、人物の消長、是に于いて乎在りと、則ち夫れ斯の図の世に重んぜ見るは、又た豈に惟だ西園を以ってするのみならん哉、

ところが「西園雅集図」は南宋にすでに存在していた。『後村先生大全集[22]』には、鄭徳言書画と題して、「坡公進紫薇花詩真蹟」と「西園雅集図」の二跋が見え、後者はいう、

本朝の戚畹、惟だ李端応・王晋卿二駙馬、文を好み士を喜び、劉真長（惔）王子敬（献之）の風有り、此の図の布置、園林水石人物姫女、小なる者は僅かに針介の如し、然れども之を龍眠の墨本に

比すれば、居然として富貴の態度有り、尽く固より設色せざるを以って不可とせん哉、二駙馬既に賢にして、而して坐客は皆な天下の士、世に伝う孫巨源（洙）の三通鼓、眉山公（蘇軾）の金釵墜の詞、一時の風流醞藉を想見す、世道太平極盛の候為り、未だ幾ばくならずして、烏台　詩案を鞫す矣、賓主倶に謫せられ、囀春鶯の輩も亦た他人に流落せり矣、是れ自り戚畹始めて敢て士大夫と交遊せず、山谷の詩に云う、天網　中夏に恢く、賓筵　列侯を禁ずと、深く此の句を味わえば、以って悲慨するに足る、

李端応は恐らく端懿（一〇一三―六〇）の誤り。『宋史』外戚伝中に、「端懿は能く自から刻厲し、善士を聞けば、身を傾けて之に下る、故を以って士大夫は之と遊ばば、甚だ名誉を得たり」とある。烏台詩案は蘇軾の筆禍事件、彼が多くの詩中で新政を批難したというので、御史台の獄に下し、知湖州より黄州団練副使に貶謫した。囀春鶯は王詵の歌妓の名。『許彦周詩話』に見える。例によって要約すれば、

一、鄭徳言の「西園雅集図」は、園林水石人物姫女は極めて小さく描かれていた。

二、これを李公麟の墨本と比べると、富貴の態度があった。

三、外戚の李端懿と王詵は共に賢明で、坐客はみな天下の名士であったが、蘇軾の烏台詩案の後は、両者の交遊は禁じられてしまった。

ということになるが、問題は「比之龍眠之墨本」の句である。墨本は下の設色に対しての語であるが、この表現は、龍眠の『西園雅集団』墨本なのか、或いは龍眠が描いた（任意の園林人物図の）墨本なのか判別し難い。もし前者であるとすれば、太平の盛時を謳歌しているともいえるこの図が、前章で多くの例で証したように、当時の記録はおろか、明の都穆に至るまで、全く著録されることがなかったとは、到底考えられない。記録にないという事実は、いわば負の証明で、それが存在しなかった積極的な証拠とはなり得ないことは勿論であるが、この点についてこれ以上穿鑿することはできない。

天下の耳目を聳動させた烏台詩案によって、将来の宰相を嘱望されていた蘇軾は、一跌して振わず、以後六年にわたって沈淪を余儀なくされるが、これは元豊二年、彼四十四歳の時のことである。ところがこの劉後村の言を信ずれば、「西園雅集図」はそれ以前、外戚と諸名士との交遊を描いたものである。外戚である二駙馬の一人、李端懿はすでに仁宗の嘉祐五年に歿している上、他の一人の王詵や彼と同年の蘇軾とは、実に二十三の年齢差があるため、王・蘇以下の諸名士と宴遊を楽しむことは不可能である。こうして彼を除けば、雅集の主催者は王詵にしぼられる。ところで文中の「烏台鞫詩案矣、賓主倶謫」という記述を信用すれば、雅集は当然詩案以前に行なわれたことになり、諸名士が一処に会する機会は殆んどなく、假りにあったとしても、その参集者は米芾の記によって知られる十六人とは、全く別のグループであったに違いない。というのは、例えば詩案当日ですら、最年少の張耒や晁補之はわずかに二十五・六、到底諸名士の列に加わる資格もなかったのである。因みに言えば、張は[23]「弱冠に進士に第し、臨海主簿・壽安尉・咸平県丞を歴て、入りて太学録と為る」、陳は[24]「進士に挙げられ、……澶州司戸参軍・北京（大名）国子監教授に調せられ、元祐の初め、太学正と為る」という閲歴で、年時は特定できないが、両者共に当時は外任にあって、都の汴京にはいなかったと考えられよう。

このように検討してくると、蘇軾におくれること百五十年の劉後村克荘（一一八七―一二六九）のこの跋は、遽かには信じ難く、先の要約の一と二を除けば、殆んどが彼の臆測、乃至はその「西園雅集図」に添えられていたかも知れない、無責任な先人の題跋を踏襲したものであろう。

要するに、鄭徳言は北宋諸名士の宴遊を、前代の藍本や模本の類を参照しつつ、多分に空想を混じて描いたものにすぎず、その場所も人物も特定できるものではなかったのである。それでは一体どうしてこの図に、西園という特定の名が冠せられたのであろうか。

七

思うに西園は多くの例で示したように、普通名詞としては、園遊に最もふさわしい称呼である。唐の『尚書故実』[25]が記すところによれば、画聖顧愷之に「清夜遊西園図」があり、梁朝の諸王の跋尾の処に、「図上の若干人、並びに天厨を食う」と説明されていたという。天厨とは宮廷での食事のことであろう。同書はこの名画の流伝の過程を詳述しているが、それほどにこの図は当時に重んじられ、かつ喧伝されていたといえよう。明の王世貞は『尚書故実』[26]の文を要約した後、「今伝わる所の西園図は、乃ち王晋卿が李検法公麟に求め、蘇黄米秦諸公の雅集を画きし本也」と、顧愷之の「清夜遊西園図」が、この「西園雅集図」の底本となったと断言しているが、それでは、顧愷之の作はどうであったろう。それを最初に著録する宋の『広川画跋』[27]は次のように述べるが、具体的な構図は不明である。

……鄭彦荘が得し所の西園図、此れ殆んど摹搨に善く工を為す者なり、其の取るは何れの年自りせるかを知らず、粉丹皆は尽き、惟だ巻墨僅かに見る可し、筆墨奇古、俗韻を擺脱す、其の人物態度に在りては、猶お是れ当時の気習、以って想見す可し、顧うに後世画工の筆力は到る能わざる也、顧長庚は初め、曹子建の詩を以って此の図を作る、梁朝に在りて入録せられ、第一と為る、

鄭彦荘は人名索引の類にその名を検し得ないが、先に劉克荘が書きとめた鄭徳言その人、或いはその子孫かも知れない。もしそうとすれば、『広川画跋』と『劉後村大全集』は共に同じ図について論じているのであり、画題がたまたま前者では「清夜遊西園図」、後者では「西園雅集図」となったにすぎない。そしてそれが元代に入ると、顧愷之の作として伝ったものが、いつしか李公麟に代って、「李龍眠雅集図」となってしまったのではないかとも思われる。顧長庚は愷之、曹子建はいうまでもなく建安の詩人、八斗の才を称せられた曹植である。その詩は「公讌[28]」と題し、下に「建安中、魏の世子丕と偕に、西園燕会の作」の注がある。

公子敬愛客　公子　客を敬愛し
終宴不知疲　宴を終うるに　疲るるを知らず
清夜遊西園　清夜　西園に遊び
飛蓋相追隨　蓋を飛ばせて　相い追隨す
明月澄清景　明月　清景を澄ましめ
列宿正參差　列宿　正に参差
秋蘭被長坂　秋蘭　長坂を被い
朱華冒綠池　朱華　綠池を冒す
潛魚躍清波　潛魚　清波に躍り
好鳥鳴高枝　好鳥　高枝に鳴く

神飈接丹轂　神飈　丹轂に接し
輕輦隨風移　輕輦　風に隨いて移る
飄飄放志意　飄々として　志意を放ち
千秋長若斯　千秋　長く斯(かく)の若くせん

詩は叙景に終始し、人物の描写は全くないため、顧愷之がこの詩によって、どのような状況を設定したかを想像することは困難である。しかしそんなことはどうでもよい。ここで必要なのは、西園での宴遊ということだけである。ただ登場人物の総数を除いては。

ところで劉克荘の死の三年前に生まれた元の袁桷は、五章で詳説したように、雅集は元豊の間の王詵、元祐初年の趙徳麟がそれぞれに催したとしている。しかし先の劉克荘は、烏台詩案の後には戚畹と諸名士との交遊は行われなくなったといっている。趙徳麟はその姓と名からして王室に連なる者であることは明らかである故、劉の証言を信ずれば元祐初年の趙主催の雅集は存在することができない。更に論証を困難にしているのは、劉が参集者の側の人物を全く記さず、袁が前回のそれとしてただ米芾・劉涇の二名、後回は蘇軾・黄庭堅・張耒・晁補之・秦観の五名を示すにすぎないことである。これではいわゆる「西園雅集図」には、果して幾人の登場人物が描かれていたのかも判明せず、従って世に流伝する文士の高会や騒人墨客の清遊の図が、指して「西園雅集図」であるとされても、反駁することさえできない。

また劉が雅集の主催者を李端懿と王詵に、袁が同じく王詵と趙徳麟とに擬しているのは、確拠があってのことであろうか。思うに新法旧法の軋轢と、洛党・蜀党・朔党の確執がそれほど表面化せず、政敵を一掃するほどに尖鋭化しなかった元豊・元祐の頃、繁華を極める汴の都において、文を好み士を愛する王侯貴戚の間では、数々の雅会が催されたことであろう。そしてそこには当然、蘇門を中心とする芸文の名士たちも招かれたことであろう。しかし米芾の「西園雅集図記」が挙げる十六名は、果してこのように同時に一処に参集できるのであろうか。

いま、これら十六人の登場人物中、生卒の判明する者は十一人。それらの中で更に年譜を有する者四人。即ち蘇軾・蘇轍・黄庭堅・米芾であるが、元豊・元祐両年間に限定して、前三者を対照すれば、次表となる。なお米芾には該当記事が少なく、利用できない。年譜は次の三種である。

王宗稷『東坡年譜』
曽棗荘『蘇轍年譜』（四川大学々報叢刊21、一九八三）
楊希閔『宋黄文節公庭堅年譜』

これら三名に限っても、中央政府に同時に在任し得たのは、元豊八年末から元祐四年の初めに至る三年余りにすぎず、従って他の十三名の閲歴をここに重ねてみれば、恐らく数名の欠席は免れないであろう。まず第一に円通大師はすでに元豊五年に入寂している。

米芾の『書史』『画史』を見れば、彼が王詵を初め、蘇軾・劉涇・李公麟等と交遊のあったことは明らかであり、また蘇軾を中心とした場合、いわゆる四学士（黄庭堅・秦観・張耒・晁補之）がすべて含まれることから、十六名の登場人物が、何らかの縁由を持ち相知の関係であったことは否めないが、それでも同時の集会というのは絶望的といえよう。

	年令	蘇軾	年令	蘇轍	年令	黄庭堅
元豊1（一〇七八）	43	徐州	40	簽書南京判官	34	衛州
2	44	徐州→湖州	41	〃	35	北京（大名）
		烏台詩案				
3	45	→黄州	42	監筠州塩酒税	36	→中央→吉州
4	46	〃	43	〃	37	太和県
5	47	〃	44	〃	38	〃
6	48	〃	45	〃	39	→徳州
7	49	黄州→泗州	46	→歙州績県	40	〃
8	50	泗州→登州	47	校書郎	41	秘書省校書郎
		→中央				
元祐1（一〇八六）	51	中書舎人	48	右司諫・起居郎	42	集賢校理
2	52	翰林学士	49	・中書舎人	43	著作郎
				→戸部侍郎		
3	53	〃	50	〃	44	秘書省・史局
4	54	→杭州	51	→翰林学士・知制誥	45	〃
5	55	〃	52	権吏部尚書・御史中丞	46	〃
6	56	杭州→潁州	53	→尚書右丞	47	→起居舎人→丁憂
7	57	〃	54	→門下侍郎	48	帰郷
8	58	端明殿侍読学士	55	〃	49	→編修官

八

以上、文献のみによって「西園雅集図」成立の過程を探査してきたが、これまでの経緯をここで整理しておこう。

一、北宋末の米芾記、李公麟画と称する「西園雅集図」は、明の中葉の都穆に至るまで、著録されたことがなかった。

二、西園と名付ける園林は、汴にも洛陽にも、個有名詞としては存在しなかった。

三、十六名の参集者の中、誰一人としてこの雅集に言及する者はない。

四、この図の成立に係ると思われる文献は、管見の及ぶ限りでは、すでに論じた次の五種である。

a　南宋董逌「跋顧愷之清夜遊西園図」

b　〃　劉克荘「題西園雅集図」

c　元　袁桷「題李龍眠雅集図」

d　〃　黄溍「述古堂記」

e　〃　陳基「跋西園雅集図」

ところでこの図に関して確認しておかねばならないのは、一、米芾の書と撰文であること。二、李公麟の画であること。三、雅集が西園で催されたこと。四、登場人物が蘇軾を中心とする十六名であること。――この四点である。順次に検討してみよう。まず董逌。

鄭彦荘が得た顧愷之「清夜遊西園図」模本は、曹植の詩に歌われた状景を描いたものであるが、王世貞はこれが「西園雅集図」の底本となったという。登場人物と構成は、「図上の若干人、天厨を食う」とある説明以外は不明。次に劉克荘。

鄭徳言の「西園雅集図」は、李端懿・王詵が主催する雅集を描いたものであるが、中に「龍眠の墨本に比すれば云々」の語がある故、李公麟の筆でないことは明らかである。「坐客は皆は天下の士」とあるのみで、人物も人数も不明。続いて袁桷、

李公麟が元豊年間にこの「雅集図」を作ったとするが、西園の語なし。後更に一本を作ったが、登場人物を若干特定するとしても、

総数は不明。続いて黄溍。

元末の繆貞が宋内府旧蔵の「述古図研」を得たが、そこに刻された図は、李公麟が唐の李昭道の「雲泉花木人物図」を模写したもので、鄭天民が十六名の人物を蘇軾等に擬定した文を作った。最後に陳基。

駙馬都尉王詵がその西園に諸老を招いた。

このように見てくると、まず北宋の盛時、宗室に連なる者が、文士を招いてしばしば宴遊を催すことがあった。その人には李端懿・王詵・趙徳麟等が擬せられた。それを描いた図は前代から流伝する雅集図を主として模したものであった。場所には最もありふれた西園という名が冠せられ、画家には当時、人物や馬を描いて最も声誉があり、かつ文士たちに重んじられていた李公麟が選ばれた。因みに言えば、彼は元祐の進士出身で画院の画師ではない。最後に十六名の登場人物が、鄭天民が假りに比定した名によって特定され、それが定着した。

「西園雅集図」は恐らく、こうした順序をたどって世に現われたのであり、諸家の詩によって判断すれば、元末に偽作されたこの図には、まだ米芾自筆の図記は附されていなかった。と結論してよいであろう。

九

この「西園雅集図」の成立に関りあると思われる証言と、その図を歌った詩を一瞥する時、一つの奇妙な暗合がある。

劉克荘は福建莆田、袁桷は浙江鄞、黄溍は浙江義烏、陳基は浙江臨海の出身であるということは、この図が醸成されたのは、恐らく浙江の地であることを示唆しはしまいか。そしてこの図を歌った于立は南庚廬山の人であるが、会稽山中に道を学び、呉中に僑居して、崑山の顧瑛と親しかった。姚文煥は江蘇崑山、張天英は浙江温州、胡助は浙江東陽、王恭は福建長楽の出身である。

このことの意味は恐らくこうであろう。即ち北宋から南宋へ、臨安の都へと渡った、名士高会とも称すべき古画があった。それが伝移模写の過程で、次第に前記の内容をもつ名画に変身していった。そしてそれを手に入れたのは、崑山の顧道進であったことは、張天英の詩題によって知れる。道進は顧元礼の字、彼は有名な金粟道人顧瑛[注29](一三一〇―六九)の次子で、その家は当時の文人たちの豪奢なサロンであった。『明史』本伝[29]はいう。

顧徳輝、字は仲瑛、崑山の人、家は世〻素封、財を軽んじて客と結び、豪宕自から喜び、年三十、始めて節を折りて書を読み、古書・名画・彝鼎・祕翫を購い、別業を茜泾の西に築き、玉山佳処と曰う、晨夕、客と其の中に置酒して詩を賦す、四方の文学の士、河東の張翥、会稽の楊維楨、天台の柯九思、永嘉の李孝光、方外の士張雨・于彦・成琦・元璞の輩、咸な其の家を主とす、園池亭榭の盛、図史の富と餼館声伎、並びに一時に冠絶す……

いうまでもなく元末のおよそ十年は、この呉の地方は張士誠の拠る所となり、西からする朱元璋の猛攻に辛くも堪えていた。次第に蚕食されるその領域も、無錫―蘇州―嘉興の線で最後まで支えられ、その背後にあった崑山は幸いにも安泰であった。

顧元礼はこの元季の十年には、その父の年齢から推せば、恐らく三・四十歳に達しており、名士たちの交流に加って、或いは尊俎の

間に周旋し、或いは翰墨の場に優遊することも多かったに違いない。そしてそのような時に、偶たま手に入れたこの「西園雅集図」を示して、坐客に誇ったことであろう。玉山佳処の豪奢もこれに遜らぬなどと豪語しつつ。

ところがその家に集った名士たち、例えば楊維楨・柯九思・張雨は、当時の最もすぐれた鑑賞家であり、李公麟の「西園雅集図」などというものは存在し得ず、それが贋鼎であることを見抜いていた。恐らく彼らは跋文や題詩を求められても、笑って応じなかったのではないか。しかし彼らほどには玉山佳処と親密ではなく、また世に声誉を博するに至らぬ人たちは、それを要請された時、喜んで吹聴の役割を果したと思われる。それは宴遊に初めて招かれた者の快い義務でもあり、また自からの存在を顕示する絶好の機会でもあったから。前章に引いた彼らの名と詩題を再録すれば次の如くである。

f　金　劉祖謙「雅集図」七絶
g　元　于立「題西園燕集図」七古
h　〃　姚文煥「題西園雅集図」五古
i　〃　張天英「題顧進道所蔵西園雅集図」七古
j　〃　胡助「題王晋卿西園雅集図」五古
k　明　王恭「題宋王駙馬西園雅集巻」七律

金の劉祖謙はその行蔵を明らかにし得ないため、以下の諸詩との関連を説明することができない。ただ結句に「席上揮毫有大蘇」とあることによって、北方の金にも類似の「雅集図」が流伝していた、と想像するにとどめておく。

次の于・姚・張三家の古詩は、すべて『歴代題画詩類』に採録されたものであるが、恐らく顧元礼蔵の「西園雅集図」の巻末に連続して記されていたものであろう。この中の于立が顧瑛と親しかったことは前に触れた。姚文煥は他でもない崑山の人で、次の張天英が顧進道所蔵と詩題に記すことから、この推測は容易に成立する。

ここに至ってようやく、この「雅集図」捏造の過程と、最初の著名な収蔵家と、題詩の諸作者との関係が明らかになったのであるが、こうして一旦、この「西園雅集図」が世に現れると、真偽の穿鑿よりも、先朝への思慕や盛時の追懐が、忽ちに風雅の士や好事家の心を捉えてしまったのである。

十

米芾「西園雅集図記」と黄溍「述古堂記」の登場人物は共に十六名、その順序に並べると次表のようになる。また下欄に三種の異本のそれを示す。

一見して明らかなように、「西園雅集図記」は、ほぼ「述古堂記」の排次を襲ったものであることが分る。ただ後者の陳無己が鄭靖老に入れ代わっているのが唯一の相異である。鄭靖老は伝記索引の類にもその名を検し得ず、何故に無名の人物が陳無己に替ることができたのか、今となっては推測すべき史料もない。

この「西園雅集図」がひとたび世に喧伝されると、忽ちに多くの模本が作られ、或いはすでに宋代にそれが存在したかの如くに装って簇出してきた。南宋前半の劉松年や同中葉の馬遠[30]の作がそれである。楊士奇[31]の「西園雅集図記」はいう、

余は近ごろ広平侯の家に劉松年が伯時の図に臨せる有るを見る、位置は頗る同じからず、文潜・端叔・無己・無咎の四人無く、器

	西園雅集	述古堂記	劉本	陳本	鄒本
1	東坡先生	東坡先生			
2	王晋卿	王晋卿			
3	蔡天啓	張文潛	×		×
4	李端叔	蔡天啓			
5	蘇子由	蘇子由			
6	黄魯直	黄魯直			
7	李伯時	△陳無己	×		×
8	晁無咎	李伯時			
9	張文潛	李端叔	×	×	×
10	△鄭靖老	晁無咎	×	×	×
11	秦少游	陳碧虚			
12	陳碧虚	秦少游			
13	米元章	米元章			
14	王仲至	王仲至			
15	円通大師	円通大師			
16	劉巨済	劉巨済			

物も亦た小しく異なる、然れども後来、伯時を臨する者は、僧梵隆・趙伯駒の輩の如く、一人に非ずと聞く……

この文によれば、明代前半すでに、南宋画院の名手たちが臨模した李公麟「西園雅集図」があることが分るが、これらがすべて贋鼎であることは言うまでもない。楊士奇はこの文の冒頭で、「中書舎人陳登思孝、閩人朱孟淵が作りし所の西園雅集図を得て、余に贈る」といい、また熊天慵が伯時の西園図に題した詩を見た、と記している。

更に同じく三楊の一人楊栄は、「題雅集図後」[32]において、葉石林(夢得)の序があるこの図を、侍講の鄒仲熙が得たことを述べ、人物は凡そ十二人といっている。前表にある劉本は劉松年の、陳本は陳登の、鄒本は鄒仲熙の「西園雅集図」の登場人物を示したものであるが、

挿図5　西園雅集図　石濤

汴京富戚里　汴京　戚里に富み
王氏乃其賢　王氏　乃ち其の賢
雍容重文學　雍容　文学を重んじ
瀟洒樂林泉　瀟洒　林泉を楽しむ
名園足勝概　名園　勝概足り
景物俱清妍　景物　俱に清妍
嘉時愜幽賞　嘉時　幽賞に愜(かな)い
休暇適所便　休暇　便とする所に適す
一時英俊流　一時　英俊の流
冠蓋來翩翩　冠蓋　来ること翩々

元末に初めてこの図が偽作されて、百年を経ぬうちに、夥しい数の模本が現れ、それらは登場人物の数のみならず、構図も互いに少なからず異なるものであった。

このことは当時すでに識者の注目する所となったようで、葉盛はそれを『水東日記』[33]の中に詳しく書きとめているが、いま構図を克明に歌う楊栄の「雅集図」[34]五古を引いてみよう。

坡翁絶世資　坡翁（蘇軾）　絶世の資
揮洒筆如椽　揮洒　筆は椽（てん）の如し
偉哉丹陽公　偉なる哉　丹陽公（蔡肇）
據几方凝然　几に拠って　方（まさ）に凝然
主家兩名姫　主家の両名姫
並立何嬋娟　並び立ちて　何ぞ嬋娟たる
珠翠盛容飾　珠翠　容飾を盛んにし
雲鬟下垂肩　雲鬟　下りて肩に垂る
雙松高崔嵬　双松　高くして崔嵬
上有凌霄纏　上に凌霄の纏る有り
石床清且潔　石床　清く且つ潔く
古器相駢聯　古器　相い駢聯す
玉巵發光潤　玉巵　光を発して潤い
瑤琴絙徽絃　瑤琴　徽絃を絙（は）る
伊誰寫此圖　伊（こ）れ誰ぞ　此の図を写せるは
云是李龍眠　云う是れ李龍眠
潁濱暨山谷　潁浜（蘇轍）と山谷（黄庭堅）
傍觀志何專　傍観　志は何ぞ専らなる
淮海自知音　淮海（秦観）　自から音を知り
側耳碧虛前　耳を側（そばだ）つ　碧虛（陳景元）の前
飄飄米南宮　飄々たり　米南宮（芾）
洒翰飛雲烟　翰に洒（そそ）ぎて　雲烟を飛ばす
王郎獨仰觀　王郎（王仲至）　独り仰ぎ観
但覺蛟龍騫　但だ覚ゆ　蛟龍の騫（あが）るを
亦有蒲團僧　亦た有り　蒲団の僧（円通大師）

西園雅集図巻　馬遠

趺坐語空圓　趺坐して空円を語る
劉君諦聽之　劉君（劉涇）之を諦聴し
無乃好逃禪　乃ち逃禅を好む無からんや
陰森古檜茂　陰森として　古桧茂り
晻靄芭蕉連　晻靄として　芭蕉連る
清風洒修竹　清風　修竹に洒ぎ
芳氣出蘭荃　芳気　蘭荃より出づ
恠石倚幽壑　怪石　幽壑に倚り
泉聲落潺湲　泉声　落ちて潺湲たり
佳景已如此　佳景　已に此の如し
況復開賓筵　況んや復た賓筵を開くをや
諒匪塵中人　諒に塵中の人に匪ず
不異瀛洲仙　瀛洲の仙に異らず
良會雖一時　良会　一時と雖も
英聲振八埏　英声　八埏に振う
蘭亭付陳迹　蘭亭　陳迹に付し
蓮社徒荒阡　蓮社　徒だ荒阡
奇哉西園集　奇なる哉　西園の集
圖畫今流傳　図画　今に流伝す
嗟我懷昔人　嗟　我れ昔人を懐い
景仰心惓惓　景仰して　心は惓々
摩挲想風采　摩挲して　風采を想い
歌詠聯詩篇　歌詠して　詩篇を聯ぬ
斐然愧續貂　斐然として　貂に続ぐを愧づるも
願以厠末編　願くば以って末編に厠け

この詩中に歌われる人物は蘇軾以下十名であるが、すべて黄溍「述古堂記」と米芾「西園雅集図記」の描写と一致する。ところでこれまでに吟味してきた明の正統(十五世紀中頃)前後までの記録には、不思議なことに、この李公麟の図に米芾の図記が彼自身の筆で書かれていたとするものがない。これは一体どうしたことか。

これら三楊の時期以後も、「西園雅集図」の偽作の増殖はますます盛んとなったようで、十六・七世紀に跨る万暦の頃の胡応麟は、「余が見る所の此の巻は甚だ衆し」といい、扇面に描かれたそれに対して跋を書いている。[35]また彼は続けて、郷里の先輩徐某が持っていた恐らく元代の敗絹の模本を見た、と記しているが、その巻末には虞伯生(集)の跋があり、方古端勁で子昂(趙孟頫)や敬仲(柯九思)に劣らぬ合作であったと述べている。ということは、この模本にも米芾「西園雅集図記」が恐らくなかったのである。また胡にやや先行する文嘉も、「李公麟が西園雅集図、設色も亦た佳品」とのみ記すことは、やはり同じことを証しているように思われる。[36]

ところが明末に至ると、突如として米芾の撰文と書ということが加わってくる。そのことをいうのは芸苑百世の師と称せられた董其昌で、次の三跋を見る。[37]

往に余は京師に在り、古画二十余冊を得し中に、李伯時が西園雅集図有り、米元章は序を書す、余は之を鴻堂帖に刻し、世に行なわる、

余は京師に游び、曽って李伯時が西園雅集図を鑒するを得たり、米南宮が蠅頭の後に題する有り、甚だ蘭亭の筆法に似たり、

……余は長安従り団扇上なる者を買い得たり、米襄陽の細楷極めて精、但だ何本なるかを知らず、又た別に仇英が模する所、文休承(嘉)が後に跋する者を見る、

鴻堂帖はもちろん彼が刻した『戯鴻堂法帖』のことで、米芾のこの書は二十行、その巻一に刻入されている。この三跋によれば、董其昌は少なくとも画冊と団扇と仇英の模本を見たことになり、前二者にはいずれも米芾の細楷もしくは蠅頭書が記されていたことになる。

十一

このように見てくると、元末に出現した「西園雅集図」は、李公麟の筆に假托されただけで、登場人物もその総数も特定されてはおらず、極めてあいまいなものであった。幸いにも李には「葛稚川移居図」[38]「蓮社図」「十六羅漢図」等の衆人群集の描写にすぐれた作品があり、当時の名士たちとの交遊を証する多くの詩がのこされている。こうして蘇軾を中心とするグループが、次第に比定されるようになり、場所はおのずと宗室に連なる者の邸宅に擬せられ、画家また収蔵家として文士たちの間で認められ、敬愛されてもいた王詵が、パトロン的存在として浮上してきた。

そして元来から明初にかけて、南宋諸大家の名を假りた「西園雅集図」模本が多く偽作されるようになると、黄溍「述古堂記」の記事に気付いた者が、それを奇貨として登場人物を十六名とし、それぞれの人物に個別の表情を与えるようになった。しかし「述古堂記」を少し改竄して、それを米芾の撰文と書とすることは、何故かかなり遅れ、明末まで延引したのである。米芾には「九雋老会序」[39]等の雅集参会を叙した文章があり、ひとたびそれが彼の書であるという

ことになれば、李の画、米の書ということで、最も好都合であり、かつ説得力も充分である。

明末万暦の頃、王世貞や項元汴に代表される鑑蔵家が、互いにその蒐集の富を誇っていた時、李・米両者の合作が出現したのも、いわば自然の趨勢であった。そしてこの様式が定着すると、画ばかりではなく、尊敬は書にも注がれ、先述の董其昌のように、それを法帖に刻入し、或いは張瑞図[40]のように、それを臨模する者さえ現れるようになった。清の汪由敦[41]は、

老米の此の書、直に蘭亭の三昧を得たり、本家の習気を脱尽し、最も合作と為す、

と激賞し、更に、

蘭亭の禊飲自り而後七百余年、此の集は実に其の盛を継ぎ、観る者をして一時の人物の風流、千古に卓絶するを想見せ令む、記中に年月の考う可き無しと雖も、人と地とを以って之を推すに、当に元祐二三年の間に在るべし、東坡先生は時に翰林学士と為る、集中の王晋卿の詩に和するの序は、元祐の初めに作らる、其の後数しば酬倡有り、而して伯時が帰去来・陽関二図に題する詩は、編集も亦た相い次ぐ、図は未だ必ずしも西園の画く所ならずと雖も、諸人同時の聚会は、則ち再召還朝以後の事なり、元豊の初め、京師に在りし時に非ず、

と、空しい考証を列ねている。しかしこの程度の理解でも、まだしも董其昌の無批判の称賛に勝る。彼によれば更に驚くべきは、『竹雲題跋』や『虚舟題跋』によって、その考証の精を誇る王澍でさえ、この偽作を米芾の真蹟と認め、臨模に努めたということである。

王篛林前輩、此の記を臨すること最も精なり、余が家の絹本は、是れ康熙丁亥（四六）の年に臨する所、時に年は正に四十、精力極めて壮んなり、覆して真蹟と視ぶるに、幾ど毫髪に於いて爽わず、

ここにいう真蹟とは、どのようなものか明らかではないが、康熙も半ば、十七世紀の末にもなれば、米芾「西園雅集図記」真蹟と呼ばれるものさえ、巷間に見られるようになっていたのであろう。附記すれば、清末の何紹基[42]にも、この臨本が伝存している。

清末の陳壽祺も一本を得て甚だ喜んだとみえ、「西園雅集図跋[43]」に詳しくそのことを語るが、法寸と印章について記すのは、これが最初である。

……道光十年（一八三〇）庚寅秋、余偶たま是の図を得たり、幅長は三尺有九寸、広尺有九寸、側に蔡肇天啓の小印章二有り、図中の十有六人、面目は生けるが如く、動作俯仰、一一精妙絶倫なり、衣褶は皆な鉄線描法、二蘇の状貌、観る者は問わずして昆弟為るを知る、余は一見し、即ち定めて伯時の筆、米氏の記と為す……天啓は画を善くすと雖も、恐らくは未だ是を造る能わず、且つ印識甚だ新たなり、妄人贋して之を為る耳、

蔡肇は十六名中の一人、米芾の墓誌銘を書いたことで有名であるが、清末ともなれば彼の名を冠した偽作さえも現れるようになっていたのである。

「西園雅集図」については、伝馬遠・仇英・石濤等の構図や、また宋代園林との関連等考察を要する問題も多いが、いずれ他日を期したい。

〈注〉

19 胡助『純白斎類稿』巻四
20 王恭『白雲樵唱集』巻三
21 陳基『夷白齋稿外集』巻下
22 劉克荘『後村先生大全集』巻一〇四・題跋
23 『宋史』巻四四四、文苑伝六　張耒
24 同、陳師道
25 李綽『尚書故実』不分巻
26 王世貞『弇州山人四部稿』巻一五五「芸苑巵言」附録四
27 董逌『広川画跋』巻五
28 曹植『曹子建集』不分巻。また『文選』巻二〇。なお詩題の注は丁福保『全三国詩』による。
29 『明史』巻二八五　文苑伝一・顧徳輝
30 馬遠「西園雅集図」（クリーヴランド・ネルソン両美術館所蔵『中国の絵画』所載。№43　昭和五十七年十月　東博図録）
31 楊士奇『東里続集』巻一・西園雅集図記
32 揚栄『楊文敏集』巻一五・題雅集図後
33 葉盛『水東日記』巻三三・西園雅集図臨本。また同巻三四・西園雅集人数
34 楊栄『楊文敏集』巻二
35 胡応麟『少室山房集』巻一〇九・跋伯時西園雅集図
36 文嘉『鈴山堂書画記』不分巻
37 董其昌『容台別集』巻五・雑記、また同巻六・画旨
38 この図に関しては、朱石『白雲稿』巻三・識画の説明参照。
39 米芾『宝晋英光集』巻六
40 張瑞図「西園雅集図記」
41 汪由敦『松泉集』巻一七・跋手臨米元章西園雅集図記五則
42 何紹基「西園雅集図記」。なお彼は蝯叟試書として、「襄陽が西園雅集図に題せる小楷は、極めて精軼、坡公が小楷前後赤壁賦と、美を並ぶに堪えたり」と跋している。
43 陳壽祺『左海文集』巻七・西園雅集図跋

なお最後に、わが市河米菴に次の考証のあることを附記しておく。

西園雅集圖記

『米菴墨談續編』巻之二

世ニ所傳ノ李伯時西園雅集圖ハ、米元章記ヲ作ル、ソノ蠅頭行楷精妙、イマ玉烟戲鴻諸帖ニ載ス、但宋時其名ヲミズ、金ノ劉祖謙始テ題雅集圖七絶アリ、其後元ノ于立姚文煥張天英等長篇ノ題詩アリ、明詩嚴氏書畫記ニミヘ、葉向高蒼霞集中ニモ題詩數首ヲノス、董其昌容臺集ニ云、昔李伯時西園雅集圖有兩本、一作於元豊間王晋卿之第、一作於元祐初趙徳麟之第、余從長安買得團扇上者、米襄陽細楷極精、但不知何本ト、按ズルニ西園ハ定テ王晋卿ノ賜第ナラン、實ニ蘭亭以後ノ盛事ト云ベシ、但シラズ雅集ノコト何年ニアリシヤ、明ノ范明泰襄陽志林ニハ、圖記ヲ載レドモ、東坡兄弟魯直少游諸公詩文ナド集中一首ヲミズ、且東坡晩歳恵州儋州ヘ謫セラレ、京師ニアルハ僅ノ間ニテ、子由元章亦多互ニ外補ス、竊ニ意フニ伯時胸臆丘壑ヲ取リ、一時交遊ノ盛ナルヲ圖シ、元章記ヲ作リ、蔡京章惇ノ權勢ニ與セサルヲ、後ニ示シタルモノナランカ、記中十六人、當時ノ名賢履歴ミナ考フベシ、タヾ圓通大師ノミ傳ヲミズ、石林避暑録云、伯時喜畫馬、法雲圓通秀禪師、衆生流浪轉徙、皆自積劫習氣中來、今君胸中無非馬者、得無與之俱化乎、伯時懼、乃教之使為佛像、以變其意アリ、意フニ此人ナランカ、楊文公談苑云、釋寂照號圓通大師、日本僧習王右軍書、頗得其筆法、章艸特妙、景徳三年入貢、上召見賜紫衣束帛ト、又書史會要ニモミユ、或人ノ云、此方大江定基爲僧、名寂照、遊學宋國、宋帝賜號圓通大師、コレ其人ナリト、然レドモ景徳年間ヨリ元豊ニイタルマデ、其間七八十年ナリ、恐ラクハ別人ナラン、又王弇州四部稿ヲ見ルニ、題仇實父臨西園雅集圖

後ノ跋アリ云、余嘗見揚東里所題西園雅集圖、乃臨李檢法伯時筆、有崇山絶壑雲林泉石之致、與此圖略不同、此圖僅一古檜一怪石一立壁、提筆書者爲子瞻學士、從傍喜觀者王晋卿、按卷對竚者蔡天啓、倚樹睨者李端叔、彼圖則有張文潛、而無李端叔、此圖據方石畫淵明歸去來辭者即伯時、握麈尾觀者蘇子由、握蕉扇者黄魯直、撫肩立者晁无咎、捉石者張文潛、按膝者鄭靖老、彼圖有端叔而無靖老、益以陳无己若摘阮之陳碧虚、與聽阮之秦少游、説法之圓通大士、與聽法之劉巨濟、題壁之米元章、與傍觀之王仲至、則所同也、彼圖有名姬二、曰雲英春鶯、而此皆削之、楊先生又云、曾見劉松年臨本、無文潛端叔无咎、器物小異、而僧梵隆趙千里亦嘗摹之、此圖吾吳郡仇英實父臨千里本也、余竊謂諸公踪跡、不恒聚大梁、其文雅風流之盛、未必盡在此一時、蓋晋卿合所與遊長者而圖之、諸公又各以其意而傳寫之、以故不無牴牾耳、實父視千里、大有出藍之妙、其運筆古雅、彷彿長康探微、元祐諸君子人々有國士風、一展卷間覺金谷富家兒形穢、因爲之識尾トアリ、コノ王弇州ノ跋ヲミレバ、余ガ所見ト頗相似タリ、又清初ノ林誌ガ別ニ撰スル雅集記、黄晋良書スル真跡ヲ見シニ、其中ニ原ト圖記ハ、石林鄭天民ノ作トアリ、何ノ據コトナルヲ知ラズ、